續風土記

自六至三

甲斐五拾吳

共十三

ル 4
375
2

八尋七長滿
藏書

東京帝國大學圖書之印

昭和
門 375
號
卷 2

筑前國續風土記卷之二

福岡目録

福岡城
若戸山
水鏡天神
少林寺
安國寺
德榮寺
若龍寺
長宮院

福岡博多八郡所屬郡之屬民
[illegible]廣邑なるゆえ別之ニ
福岡所
小烏警固兩神社
若宮社
大長寺
金龍寺
勝立寺
光專寺
眞子石

東照宮
鳥飼八幡宮
圓應寺
極樂寺
淨念寺
香正寺
安養院

筑前續風土記巻之二

福岡城

慶長五年　黒田長政公はじめて此國を領し玉へる年十二月上旬入國し先名島の城に住玉ふ名護屋城は天正十五年豊臣秀吉公より此地と小早川隆景に賜ふ時はじめて築る良將の經營せる城にて要害たれども長政の父如水も高き山と高き城と築ん事は國民費へ民の苦しむこと幾許か如何を思ひ造らんやと行ひ去る　長政公素然とはからく考へ玉ひ城地を考へて城下狹きを以て世世治りて久敷守るへき地を求玉ひ如水公と

お議して別に城郭を宜敷うべき地と又をるりもあるは
但し第時為戸山を海河を帯て要害ある地なれハ
城郭築へきと評議と又宜敷うる事もあるとて
利害お半をしらハ当ムりをるけして決と那珂郡瑞国村の
境内福崎と云所に於く城を築き経営して山とうて
城とあるを思し郭と接へ要害とはらしもよ芝長
六年城郭経営の事始りをしの世既に完事又廃すと
いへとも大乱れ後ハ狂不意れ変ををんうとて長
政公城郭の造化を急きのひ自るあるいること長政公
日ること其切接を為しもひ所に庶民も労勤て
悔ひ所なの城郭其切来て成をりやうて郭の

内外話士大夫れ宅門を並へく紀出をり工高れ家も
戸とはるひて埴をひるき各其家業といるをり
長政公遠きを安しし近きとあつをもひしハ城下の
第民年ること郭居し百工月ること来て集をり又国
中ハること七ヶ所城と築き上座郡左右に小石原
秋須郡弘長寺戸郡益富郡勝山郡言屋郡黒
崎若松芦屋切きハ城郭城塁とも元七年の内と建く
成郭をり屋切きハ城郭と建るといひつへし 抑此邑の
名と福岡と号せられしハ長政公先祖を江州佐々
木の一族ならしハ夢想父子田右近左衛門長政公取
て備前国邑久郡福岡の産なり 長政公其年と

只の字にて先祖の住まひ所の名を用ひ名付あひ
しを唐土代々の都れ名と多ハ其字創の帝王の
始と言まさるれ言之事と源ハ仁人
孝子れ人ハ如水云 長政公を其事と言まさ
大國の王ハ如之 始先祖の居所と思ひ名ひを
築き城と名付ける事 諸侯ハ為て居き志しと 城の
西の方むかひハ福岡の江まて入海にて居き 潮入れ
作地なりしを 此城と築き時 埋立て平地とせハ人力
多く費なん 是を用く 要害とまして尚地を
なりて別 堀を用ひる人 城内の濠と海 魚多きも
なりの汐入し 変なれいと 城れ小の方 所なれ

乾の方入海の濠と中も 高尾山の下ハ大船多く
泊りなりの濠 海 此城と築 始
多く人力を用ひて 濠と海を埋 平地として
士民の居宅とな 又城れ南の方ハ赤坂山なり
九の山と 後て要害の為 西ハ山を切て
城とし 堀の南ハ山を なしして 平地 城内の乾と
小高き山を是 又ハ九 高 山を なして
ひきくなし 如水云の 兜塚れ宅地 せる郭の
東を形河川を限り 河中と 中島と築て 高家れ坊
とし 中嶋の東西と長橋を二つ渡して 地多くつを
又郭れ東南と長堀とな 其東の橋れ一重ハ濠

嶋加賀守直茂ニ加勢ニして人夫を多く援て渡
とわたせられ候ゆへ今ニ云ふを名付て肥前渡と云
城の西ハ多良河とも云ふ外郭とし其前百尺余ニ
昔ハ河ふかしと小杭を植く屋敷杭とし其
内ニ四伊川あり尚ニ内ニ渡二ツ有て庚人町の東渡
と申て内郭とせり堀代小ハ海面ハ山ハれハ郭と接
ゆへ及ル氏其後年久敷して堀のうくれ城塁
流れ入て埋めり 光之公の時 ニ成て泥土ニ
成五代城内を渡とさ〻へ水を深くせむ其
惣司家ハ姓義新蔵村宮ニ命せられ下屋敷の
話壬九十人延享元年のころ事とそ〻ハ七年

ニ切ふりめ 長政公城内の渡とわたせ申ハ城の
西ニ有飼村の東川業の石垣深まて水ニ入毎ニ
鳥飼の第ニ有ニ第ハ又中洲ニ成し流れ水
ニ有飼代ふ事ハ第代地ニ成る苫村ニ成ハ
農民ニ成へて新田ニ成ニ東の方渡の西代ニ成
南ハ長ニ土堤を第廿庚人町ニ赤坂田島の方
へ河通ニ成ハ延享年中渡ニ成へ村の
事ふり

福岡町

町数代ハ二町 其郭内ニ有る町ハ第子町 左町 右町 其
服町 西名淀町 東名宮町 其他ハ塚ニ成ニ海ニ大屋

なて六町西へ行て西へ行て西へ行て西へ行て堅町と又三条へ出て
橋ロ町を土代宅と是より六町西へ行て猪熊へ出て
侍ゝゝゝハ奥町 第四 （此三町ハ南北へ通ス）例幕町 鍛冶町 西鍛人
町 東鍛人町 法師町 舟四郎 桟木町 （此七町ハ南北へ通ス）蓋屋新町
橋堅 ロ丁 ゝゝ十七町ハ皆福島氏の塀の郭内と 唐人町 新
丸丸町 西町 西新町 （是ハ塀の西郭の外）第院町 紺屋町 長者町 橋堅
下 是ゝ塀の東郭外にあり

東照宮 松原院

慶安三年 光国主 忠之公 蓋は山と云て建営し
東照神君の御祠を建て 兼應元年 営化功成て
四年 六月十七日 御神體を神殿に納め奉る 此時

昆沙門堂御門跡より代僧として寂場院と云僧下る
神殿拝殿義葉に玉垣瑞籬神厨廻廊あり 石れ階
ゝ石階もり 御廣前の外構ふ石階の下にて山の
構と断崖にして其間を以て奥拝ふゝゝ威霊尊
崇と幾内諸国の名社ゝも云いつゝ事 鄭ゝ社領
三百石 寄 献 ゝゝ其外月毎に十七ゝゝハ国主月参
拝ゝゝ今ゝゝて絶す 此時太夫以下上士不伺候す
御宮の傍に宮司坊と云て祭礼を修ゝ事ゝ
と福祥ゝと号し 山号 高照山院号 松源院と云天台
宗に徽山の末ゝに徽山ゝゝ豪光法師を招下して
開山と せゝゝ 貞享三年七月前主 光之公 石の名所と

神前に創立し玉ふ額に文字八曼殊院竹内良恕法親王
の御筆なり

源光院

観音山安置なり号に兼應二年國主　忠之公菩提所
のため此を創立して前将軍　家光公の霊牌と
安置し奉り毎月廿日に招礼あり其例今に於て廢
絶なし　寺産二百石寄進せらるる学剣のいとなみ
補ふなりて殿堂荒廢なり是又国家にて廢
山に来寺し叡山西塔院東谷現光院豪秀法師を
招き下して開山とせらる郷号寛文八年十月廿四孫の
貴ことかに同九年光之公初めの家八市中にをれを

ふもとに移して東照宮の西に例あり戸山の麓に
谷の中に御寺を又新に北に移し奉る延宝八年
前将軍家　綱公薨し給ひて後其御霊牌をも此御
ふもと安置し奉りて國君月の八日毎に来詣ある儀
式　東照宮に来詣のごとし

荒戸山

福岡の成立にて甚だ古き荒津とあるハ
地名といへうされども荒ハ博多にハ
山なれども荒ハ拾るなし山に山にして
四方とも高く高く眺を望るし時に
つもりつもりて海となるとも勿論なり
小海なるうるといへども

地方庶く唯一色する変目鑑の中にあり心花あるを
毋觀をもしてあるこれを弁ずるこれ
清く朗なる日々名護屋を波多のかなたに
知るべき彩霞と見めこれ尚そなたをもうんとは
なるべき人の国にまあるうるはしくいとやや
志賀の蜃の海や〜烟り唐泊殘り浦うと三ツ波庭
玉人の白沙塗と書る形多の長浜小と向ひ入へくるる
唯庭の前面るきのうらうんるうこと東ハ博多の人烟
庭く張ひ多振神代と植し名待や代の松原を
新古の多とちゝこれ西ハ又百石松原姪浦山
生れ雲原長垂山まて松のこやし長く海をく連まり

南ハ福岡の城目前をく松樹生い茂るハとし
多へと緑りとすえ千年の久変とまもりて國家の安きを
なせり時々波の琴ハ打〜こゝ伊とるく人の心を動る
り悔といまひる迷をする丈より形をきゝの里又
宅庭くおのゝ〜の街と民門と並へくけるまり家園
と多き梅柳ハ湖多れこゝるとあるとなるむ月の
はつるこハ沼とかりて春ゝるといひつゝし尚長ゝ成
りまゝ紅梅三〜桜の咲ける殘多人のなりきハと
近き泳るまハこゝ目と悦ひしめて東風めゝく吹定のけ
しきこんるゝ多さをつゝこハ天と人も共に酔ら花
そこ伊る珠の東西〜ハ千樹美淡ふ沼〜こんるわる民の

かやうの縁に入ても言に託て秀へえたへし秋の月の光
西海のかゝやき渡りてさながら金龍のたゝよふ如し夕陽
のうつりて海にいらんとするにしき東の山に移りて月出
るのめくる返照の粧ひなどを猶に勝れて月影
さやうなる事をひとつおもふくだくしきとも覚へける
春ときの山かくしくとめくりけるありて絵に画くるやうを
えも手多し四時につきて人の目をよろこばしめける中に
筑紫にても いと高き背振山は南のかたに聳へ ひと
みる言ま方向ひたるごとし又右方先に見渡せば
なる竈門山又西におへるよふさき御嶽なりかやの山
高からずといへども言がくち勝れて目立へれば国の

諺に筑紫の富士といへるとさることにて春の
初つかたは山くれなゐの峯は去年より降つもる深雪の尚残
りて千里まても作りきて鏡かける霰の内にきよう見え
るは甚だ佇くも長閑きと見ゆる山くのなくさ霧の
晴渡るにつきて出没定りけれ朝夕の変態きはまりなき
純之頭へと四方とめぐりし見るもの目の及ぶ限り広く
して所々の風景限りなく唯眼力を以て境界として目を
極りぬる楽のかぎり事尽も庭の富士にもいそのかみ
ここに此筑紫の山の宜しきは差とふらと心をとゞめて浮
世の外に出る心地たし侍る謙に勤しむべき住境なるべし
天の橋立厳島和歌の浦鉄崎須磨明石など

御免と蒙り家長竹義新右衛門利安（改と後一郎司利実父）と命じて越司とし同七年夫大村宮内河端次郎右衛門と下知行を以て活計とす大石多く潰家を生ず海辺廣く根さと称す其上石と云ふ第上山下より東北海中に長さ数町第出せり第沢二年より寛文七年迄三年を経て三切り石堤の東北端に炮台を築き毎年小吏を遣し北常と云ふ海岸に滞留し毎年国及び諸列より集まる家船も皆大小七千艘或は百艘に当て風波のうまひなく商人に交り会し是を後て福岡博多に報じ亦孫堤あり　国君を人と為んしまへらに仁恵の御恵と

船を以て住居多く人民行交し海辺に並べ雑し城北南方大体三方山を拠き第三方に書生かくれハ第城当方行乞福岡博多ハ西列の大都会にて諸列の高貴皆こゝに来り家船多く集へりしハ神の湊にて庫屋丹と為り止り行くまゝハ家船の如くを代神の湊堤にて安成しこゝを家船とせるべき湊なりして風波のあやこなし旅人に始ひかゝに船舶内の下水口と亦流く河土あつまりて流れ舟とつるこゝ行なり　光之公代付衆人の患をうまひの為に山東の墓の海中に石堤を築出し波頭こゝ国と家船をとゝむへしとて江戸へ申て

永世ニ為ル事ハ大ニ切ニ言つへし　大坂より西の方
船家の多く集る処兵庫　鞆　赤間関　長崎の外芸州宮島
の多き大湊ニ又薩州坊津の石塔ハ内ニ国君ハ大船
とゝ成へき海ニ湊を開ニ世ニ元禄元年二月ニ
始り四年十二月ニ成り

警固大明神　小島大明神

小島の神社ニ〳〵へ此所ニ始て座し給ふ城外下加茂
の小島ハ社ニ内神ニ建角身命ニ警固の神社始ハ
福浦山上ニ有り今城の本丸ハ地ニ社のたりニ古義
有り警固義ニ今ニ本丸ニ有り警固の社ニ
南ニ若一王子の社有り是ハ警固

明神の事社ニ　慶長六年　長政公福岡の城ニ築む
ゝ之ニ従ニ移ニ内社ニ下警固村ハ山の上ニ移し
ゝ之後慶長十三年第院町の東ハ方小島の社のある
所ニ移し内社ニ有るの社家者ハ傳説ニ此警固大明
神ハ日本紀神代上ニ云ニ共ニ載る神直日命大直日命八十
枉津日命の三神ニ御り給ふ当昔伊弉諾尊橋乃
檍ノ原ニ御祓し給ひ時化生せし九神の内ニ入り此
九神の事ハ日本紀神代上ニ云ニ云ニ
記ニ云ハ大明神ニ神直日の三神ニ為ハ旧記ニ於て
所ニ九神の内六神ニ住吉志賀ニ成て其余の三神ハ
左ハ四社ニ云ハ人ハ此ニ住ニ事ハ社家者の

之ヲ示さしめんと又或説に曰此九柱の神達神功皇后異
國を討せ給ひし時各神力を添させ給ふ表筒男中筒男
底筒男の三神其和魂を皇后の御身に守り給ひ荒
魂を御船に附け先鋒とし給ふ此三神ハ住吉大明神なり 表津海童
中津海童底津海童の三神ハ御舟の梶と守り給ふ海
路のなやみなく為べし此三神ハ志賀大明神と神直日
大直日八十柱津日の三神ハ軍衆と変じて勝利
と得べき事を守り給ふ是尚社の三神と此故に此
三神と後世警固大明神と称すと云 今案るに
警固と名附しハいにしへ此地に警固ありしを
伊予の神なりしハ名つけ給ひしなり 神功皇后の新羅
と討給ひし時此神軍衆と変じ給ひしと云ハ其名を
うけて後の人附会なるべし 警固の事 博多に生ずる
へしと警固と以て神と名つけしハ上代に事なきに又小
鳥の社を警固大明神と此所に移してよりこのハ
四社と称する今此社と称する所を三座として七神と中
座ハ警固の三神御座にたるに小鳥大明神白山権現と
称する右代方にハ神功皇后八幡大神と崇奉る 忠之
公の産神なりしゆへ其尊敬ことあつく御やしろの
造営もうるハしかりしに寛文八年十月廿日市中に
火災おこりて此社も回禄にかゝりしかとも後仮宮におさめ
延宝四年に 光之公再興ありて今も昔にかはらぬ

御社と恒例の祭ち九月十九日とあり此日御神樂七番
流鏑馬三番猿楽七番ちり此外年中の小祭数度あり
國君より　神領百石寄附し給ふ宮司坊ハ中臺山西
照寺吉祥院と云開山を芳秀法印と云ふ始ち長久元年
冥河法院ちの住持成しゝ　長政公の時尚ほ栄てしちと
開基ちり石代ち指あり顧ち城外八幡山の信惶々爲り
筆ち記す

小鳥明神の事ハ行と一説あり那珂郡の記事を羨院
村の西ゝ祥ち

鳥飼八幡宮

西町と云ふち指ち多賀村杉林の中と結産し給ふ　今と云ふ神本杉殘り

長政公入國の後多賀村と墅を接ち給ふ社を境内と定
し所茂長十三年今代河と移ち給ふ社家の説と云ふ
所ハ神功皇后新羅より還ち給ひ十二月四日筑紫より
上陸せ給ひ敵と入て多賀村と云ふ所ち庵を作ひ給ふち所
氏の人多代御膳を奉る　皇后御悦納ち給ふ今度の一
筆ち胎内と おりまし　皇子代御為なりとて其生先と
御いとひ中て近臣等と御中自御産と給ふ後世ち地と
御廟と立て若八幡と号しなり　御社の中殿とハ
八幡大神と云ひたてハ宮濱大神右とハ聖母大神結産し
給ふ例と彼多賀氏の始祖と為ち給ふとや　ゝ　ハ
神代多賀と云ふて多賀村の田乃字と御供田

みくの名殘まり其後村中まと三十六石代神田を寄附し
恒例の祭礼を勤行る又こ後を代代世の付吏故るて九月
十九日のこゝろをの祭を執行しの承應元年御社の側こ宮
司の坊をこて〳〵鳥飼山感應院結護寺号に天台宗の僧
住に神領二十石 志之ゝうり寄附しまの九月十九日こハ流
鏑馬あり

水鏡天神

福岡の東橋口こる社家こ言傳ふるこハ管君太宰府こ
左遷せらるまるの時御船神の湊こ着るこ船より上せ
まの飛ぶて咎と影りまひる四中の背合こ御宮の
表へるり事となるもの為こ此所こ御社を建て

水鏡の天神と号に又宮見のこ神ともなつけ行る四
十川れるこあるまハ四川の天神ともに一説こ管帝御
まかこを此川ゝうつさせまの久安船中の若こ成るこか
ゆりこ今は変こ若て者こ底の患とつるまの年若く
ゆりこ四十ゝゝゝゝゆこ宮ひ五川こ称す此時菅
公五十七歳こ宮司の坊こ松岳山梅教寺観音院こ号
長治元の時頼遷こ伯耆こ置く住職こせる是こ付る
の宮山こ

若宮明神

第院町こ鎮座の神ハ海神の豊玉姫こ尚昔ハ毎
年九月十二日こ住吉の神輿此宮まて下こせまひ夜こ

一宮一ノ宮ハ神主ノ宮ト云ハ住吉ノ社ノ也
住吉の相殿ニ蓉尾の宮おはします民俗ニハ神と称
して住吉明神の母神なりと云若宮と称するハ住吉
の神の御子なりやうに世人伝るハ住吉の神興
つくりせるの事絶てなしとハ云ども九月十三日かさるかと乃
参詣と称ス

圓應寺　浄土宗嵯西派

照福山彼光院と云慶長年中　如水公の夫人照福院殿
ふかく帰依寺と創立しもの時開基の僧と高誉上人
尼ハ和尚ハ如水公の夫人寛永四年八月廿三日行年
七十六歳福岡城中にて死ス　墓ハ

墳墓ハ故ニ寺の山号ハ夫人代霊牌及画像
と安置ス此寺肥前国唐津ハ教安ス豊前国小倉
安置ス国中ハの安置ス寺也又ハ和尚の開地せ
る寺ニ寛永六年ニ国主　忠之君より寺産一百石と
いちゝ寄附しもの　是ハ祖母の御寺なるゆえ菩提
山と　東照宮と建立の時　神体と下しおかれ
住居とて一月給置ス　ある時ハ菩提山と移しなる
ゝ住居の立ハ小き御社とて　東照神君と
祝ス　尚寺代持寺ニハ

少林寺

振治所の西北方ニ当ル高山と号ス　初ハ永寿山と云　長政
公の夫人とはなる葬ル

法号と大源院殿と号し
奉るとして山号と故 京都智恩院の末寺と開山長誉
恵明和尚と云下総国香取郡一ノ宮村の人にして俗成時
倫旨頂戴のゝち上洛し形色遠列天親川のほとりに
長設云て建立其人と成異りしかや 長設云の母と
呼ひ対話せゝもしゝ芝長八年六月と尚国とゝ
ゝ九年四月と寺院と共に安て仏殿を建立し
昌林寺と号し後と昌の字と改て少の字と用ゆ 本
尊八阿弥陀の立像にして恵心代作なりと云 寛永十二年
四月十二日 長設公代夫人江戸にて逝去しゝ遺形とハ
江戸天徳寺と土葬し送髪として此ゝと納り仮
の墓とし四十三年 忠之公より一百石の寺産と寄附

せゝる 台徳院公代御位牌と 忠之公より建立し
忠之公の妹 柳京武部大輔忠次の内室寛永二年四月
九日江戸にて卒しゝ江戸と葬しゝ柳雲院と号し公
其位牌并仮墓とし寺とゝ 牡雲院と云
ゝ院あり
大長寺 浄土宗西山派
心光山と号東職人町にゝ山寺にて 如水公の父義濃
職隆公の御位牌及画像を初 如水公の御尊位
と仏地形新田一ノ瀬村にゝ職高公の御寺と建 心光山正
岸寺と号しゝ庵あり 養心泉の後元
和二年に大長にゝ住移ゝ一ノ瀬村の西岸に俗
と此寺と移し京代進号と心光院と号ゝ

貞享元年八月二十二日京國公の百年忌に國主　光之公
より此寺にて法事を執行せらる

極樂寺　浄土宗

飛騨所の事なるに依て此所を極楽所と云ふ初
果還山と称し名僧なりし寺と鞍馬の新高田村極楽
寺に住す信行の上人と小早川隆景の帰依して名
僧寺と建て寺代号を用ひて極楽と称し　長
政公福島城を築給ひて後慶長六年名僧なりし
僧寺を移す時の住持を天誉上人と云ふと尚る
の開山と仁西保二年　忠之公妹杉平　下総池田　右京大夫
輝興代内室の位牌を建てられ立置るる　法号を清光
院と称せり此人号を清光山と改む同年六月　忠之公より
寺産五十石寄附せらる

安國寺　禅宗黄檗派

お林寺の東濠にあり　光明院の御宇寛文二年
勅願に依て國家安全を祈んとて國毎に安國寺と一
所宛立置る大般若経を始め諸宗八十と豊
前中津にあり　安國寺と　長政公豊前に御
住居の住居と天満と云　如水公長
政公の仏遇を厚し力なりしや
長政公朝鮮征伐の時も陣僧として
書簡往復の為めに其後帰朝　長政公移らるる

一時其恩を謝せんと欲すれども思ひのごとくなるを恨みて
如水公 長政公 親子に其志を感じ給ひ院
と共に下され給ひ客殿方丈かしのめく法堂して天寧院
遍照の三ヶ所に二百石を寄附せらるべきことを
下され謝して曰 公恩誠に感謝に堪へ沙門は樹
下石上を座し一衣一鉢にして乞を行ずるを法とす
寺富厚なるやうなるは如のつゝ修行おこたり菩提
心を捨て安楽地を求めず辞し去れば 長政公仰
られかく利慾を捨て法義を守る出世の法人
若もかくと云ふ但し強く扶持を受け毎日の
斎食を助けしとて毎月十日の俸を給ふ其

後西保年中に住持金雄狂疾起りし時に強く住持から
下り此人彼扶持を給て安らかなり 長政公の建のひし
堂舎を焼き田禄の災にかゝり寛永十二年十月廿日
焼失せり之後 忠之公より助成ありて今の堂舎
と再興せり

金龍寺 禅宗曹洞宗

多賀村の小西町にあり昔永正五年京田淳正が郷弘種
が創の寺にて恰五郎言知の祖村にあり大祖山と号す 長久
五年京田氏世々の墓所彼地にあり菩提所に天正
五年京田氏尚國と去て肥後に住し後に裏徽に及
へり慶長十六年 長政公の家臣に稲伊豆守寺の檀

誠ゝ多り彼ちと城ちと移さん事を吹挙して荒戸山と
寺地と給へり言和村ちり寺と移さり芝安二年 忠之公
荒戸山と 東照宮と建立ある事始し付多聞村の
代内と俗七千石横九千間の地並元禄ちし 松樹ちと
植りり白銀ある 桜木多く 西こいはし寺院の外
本堂石柱礎ちと 残し 運せ切り 其年代
九月今代地ちと移せり 此時の住持と 参道と以
芝安年中 山号と改め 耕雲山と号 塔頭二院あり
慈眼菴 龍潭庵といふ

徳栄寺 真宗西派

芝安六年と光心といふ僧 此寺と開基し 左之所と

あり 光心ちと生国 播州の人にて 此僧と 如水公
元禄知ひしゆへ 給ちと ちとして 寺 元亦 長政公
前と 来ちり 光心 播州の僧 ちり 所の人 ちと 播と 在
塔と いへり 寛永十二年 忠之公 命して 此ちと 安芸常力
直次の 墨牌と 安堂し 香花と 供へ ちと 直次 始ハ
東照宮と 仕へ 後と 紀州の 所庸と ちり

勝立寺

西真山と号し 福岡代 東の外郭 博多口の門内 あり
此寺代 開山と 唯心院日忠と云 京都 妙覚寺代 僧 法
とひろんさち 山 ちと 芝長八年四月 ちり 博多
妙典ちと おろく 日忠と 耶蘇の僧 ちり ちんと ふる乃

優劣を論して四年に及ひ日忠争ひ備りけれ　長政公
残しあい耶蘇か居ありし地を付りけ後に梵剣
と建させ宗論に備て立てる寺なれハとて勝立寺と号と
ありけるか此時まても耶蘇の御制禁なくして諸国に
彼か宗なるもしとや池田右近太夫輝興の二子　吉之済
明暦三年に卒ありしと此寺に葬なる　忠之公の外姪に

香正寺

茶院村にて岩戸の辺に出る南の出口にあり開山を日延
といふ朝鮮の産なり此僧不受布施の宗義を固く
守り時の公方の御法度を用ひすして料となりつく
けれは流されて勤めし七人なりしとや寛永九年

此寺と号し剣せしより　清涼院と云子院あり

善龍寺　禅宗派

瑞雲山と号し唐人町にあり寛永四年　如水公の夫人
卒し玉ひし時此寺院にて火葬を執行ける故にて此所を
民家とせしとて茶院光雲といふ開山の僧降経誓という
庵原村の寺に住ありしに米穀を納りけれは此寺に移されたり
然るに照福院殿の位牌ハ爰に安置されたるにより
今も位牌を安置せり

光専寺　禅宗

寛山の僧を降伏ありて長年中に此寺を創立す寛永
十五年　光之公御母公の寿影見たまひしにより

葬るを後 國君より毎年米三十苞を授しまつる今
まつて絶へず

安養院

開基の僧心誉を朝鮮國全羅道香百山安養院
代住持ありしが文禄の頃 長政公の家臣池田九郎兵
衛尉と日本にわたる九郎兵衛尉彼が志をうけて是を信ぜん
仕へ肉食をせず九郎兵衛尉彼僧の事を志ること三年石
なる家臣と呼て彼僧の志を奪ふ
犯事を呼て離別して後九郎兵衛尉彼僧の志を奪ふ
へうとして茅院を菴を結んで彼僧を置
今の朝鮮にて居る所の寺院名をとりて安養院と

号し朝鮮人の因りて此地に来て住す者多くハ
此寺に葬る所に朝鮮人の墓多し 心誉朝鮮より
持来りし佛舎利并佛書一冊今に有 世に二世と号
とかく時寛永二年国主 忠之公の時 法光院と云地
に建立ありしを此を移して茅院代南方村の内
その境内に移す

長宮院 黄石山 城園寺と号

城の小路にかくれなき昔ハ侍の宅なりしを宅
にて居る人なくして廢宅となるより寛永年中
肥後より来る清式と云へる高僧此宅に寺を建
んすと願ひ出ハ国主 忠之公是を聞召て観音

堂を建菴を結び住れ元禄十年今れ住持蒙覚新
音堂を改造る本尊観音ハ弘法大師の作と云伝へ往
古れ観音九三十三軀あり

簀石

簀子所の小海中に大なる岩あり潮干に八露出ゆる
簀石と云又魚所れ沖二丁ばかりに大岩あり是を
大築石と云小築石を堀の隅の側れ長宮院の護
广堂の下及堀れ隅の内東南に大石を此三所の岩
土中八皆一石なれ共今に云へり

右之外福島堀下和泉寺名

国通寺 都史山龍華院と言宗 西金院

威徳院 真言宗属 吉祥院 常楽院 円上 吉祥院 天龍山 禅宗洞
京属 吉祥院 京賀茂 家杉村吉祥寺 長国寺 真言宗属 松尾山多聞光寺 成道寺
八相山西林院浄土宗 松尾山属 少林寺
西流下内属 智恩院
△属 国通寺

成福寺 楊柳山 西光寺 金毫山属 笠覆一光寺 大圓寺 鏡智山△
浄念寺 海龍山西山流属 法湯禅林寺 長福寺 西海山日蓮宗下内属 京都妙蔵寺
妙法寺 曹洞山属 京都本法寺 妙安寺 西福山属 浄芝寺 真言属 京本
彩寺 勝善寺 蓮西寺 光明寺 国徳寺
真福寺 直属 京彩寺 西覚寺 法伝寺
第西寺 長徳寺 明蓮寺 真宗
属 京西 彩寺 傳照寺 真宗下内 長谷寺 誓岸寺 属 防州信光寺
西法寺 属 法栄寺下内 浄満寺 西寺

屬二十箇寺　妙泉寺　妙德寺　一箇寺　屬二十妙
行寺　光明寺　建立寺　專立寺　建寺
西光寺　屬二十箇行寺　觀音堂　一宇　新所　門一宇　新所二所　專立寺　屬二十西
光寺

筑前續風土記巻之二終

筑前國續風土記巻之三

博多　那珂郡ニ屬ス

日本後記曰淳和天皇弘仁五年冬十月庚午太宰府新羅人辛波古知ホ二十六人漂着筑前國博多津問之乘由之投風是博多の名國史に見へる初也其時こそ博多津の号なきにせよ此ころ博多なる古来なるこゝ舟泊なりしなるべし太宰府とも定れハ上代太宰府と置きし始より博多町も立なるべし續日本紀ハ仁明天皇の御宇承和人筑前大津に來りと以て大津ハ博多とさして以て三代實録十六巻に清和天皇貞觀十一年太宰府擬少貳坂上大宿祢滝雄を差して曰護

倹博多ハ元藩國輪湊の使ひ警固武衛と号す云云亦
曰貞觀十一年六月十五日太宰府言去月廿二日夜新羅
海賊京艇二艘来博多津四十二人二月八幡秀雅京
係かと勅使と云まとなる其告文曰去年六月以来
太宰府言上すらく新羅賊船二艘筑前國那珂郡
のあたりに来ると云云今按に筑前博多と云海辺荒
はとあるハ博多荒津一名なりと云へり然るハ博多ハ所
とさして言大津荒津とハ博多と毋の名く湊とさして
いへるべし倍美里の物菴集に送紹公愛帰省詩の序
に曰紹公然史ハ石城の人云境有鳥津有十里松住曰石
城ハ即筑前博多之名鳥津又号冷泉津と云

唐土の書にハ博多を霸家臺或ハ八角鳴ゐと叫
ぶと列に名付るとあるハ博多孔亭と世て此書
に云り海辺話國記に博多或ハ冷泉津と称し又石
城府ともいふ又へらく日本と世上り呉國の事集
ひ平て太宰府に近れハ古へより警蹕の地なる事
ひへて太宰府を九州を司まる官府として海を呉國り
来まる渡口なるハ西方の外藩として武備を専に
正人を地なるハ武士を多くあつめ兵器を多くおこなる
所なれ太宰府あるとも文ハ海を主とされハ博多の
海を主て定て藩營あるて号藩の度てんなる事と異
國の人を忘れなるべん續日本紀に　光仁天皇寶

亀十一年 勅曰筑紫太宰府辯居西海諸蕃朝貢舟
檝相望由是簡練士馬精鏡甲兵以永威武以備非常
とゝ云フ 古老の言傳へゝハ 天智天皇太子ゝて西國ゝ下
ゝ給ひ付 博多ゝも行宮あり 此時ハ例ゝて 博多乃
冨高ハ家ゝ ゝ興宿ゝ ゝ云事あり 今ハあやまりゝ
こゝやゝとゝ云 其割ゝ庫と名ゝ ゝ ゝして おゝゝ
ハゝ言ゝ ゝ ゝ 所興の輕ハ ゝ ゝ ゝ 名ゝ ゝ
ゝ 朝野群載第二十巻 博多津中華船の事
事を朝廷ゝ告ゝ ゝ文ゝ ゝ 其文ゝ曰

警固所解 申請申文事

言上新羅唐船一隻 子細狀

右件唐船今日酉ノ時筑前國那珂郡博多ノ津志賀
嶋到来ス者任先例子細言上如件以解ス

鎌田口吉任

長治二年八月廿日

本司兼監代百濟惟助

長治ゝ人王七十三代 堀川院の年号ゝ右の記ゝ ゝ
以て ゝ ゝ唐船入津の時毎ゝ此言上ゝ ゝ警固
ゝ ゝ ゝハ此津守護人の居ゝ ゝ 又大明の茅元儀の
著ゝ ゝ武備志日本考ゝ國ゝ三津ゝ ゝ高麗船の集
ゝ ゝ海ゝ通ゝ ゝ西海ゝ ゝ坊の津 薩摩ゝ 紀
旭津 能州ゝ 伊勢ゝ 泊ノ津 肥後ゝ 三津ゝ ゝ坊のはと

想浦と云ふ所に船泊と必ず旭港と中津と云
地方いろ〳〵潮とて人海集港す中國の海高い地
と集まる所なり此地方又山陰と云
所も貨物或は俵或は俵ぐ唯中津と云ふ
所と書り実も此港多くは昔唐土より集り来て
吾日本の國こゝを立場とこゝに集り民軒を
連ねて民生日用の食貨乏しかりし旦古寺梵刹又長
城と宮方殖産の地として天府の邑と云つべし此南
の中に〳〵いへば東西に通る入海あるを神の湊と
号し宮殿の入り湊と此入海より小澳の湊と云
今は入海は平成て湊のみ残りて横一里ばかり

ある海東西に通ずる巨と大小と号し亦小澳
の湊は少ある海西には石畳長くつゞきて東は第浮多く
陸地なり西は今津と及へり是を上古より此港の海湊
長城の如きこゝを石垣と第一の崩壊なりしを文明弘
安の頃蒙古の賊兵三万余にして日本を攻しは防ぎ
彼へ乃ち石垣を修補せしもの也其事は古戦場記に詳
記し伝る大内家繁栄の時を神の入海より南を
守護所として大内氏の治む澳の湊は大友氏所領なりしを
海原話國記と博多所民家千戸武殿大友殿と
所領なり小武は西方四十人家戸大友は東北六十人家戸
と云海原話國記と云へる書を朝鮮人の著作て

成化七年にあたり我朝の文明三年に当りぬ此時の河治
なりしかも此後大友氏と大内家とは地を争い合戦せ
時度々矯失せしかば天正の時に成りて大友家と龍造寺度
々合戦をしかば僅に殘りし民家さへ又兵火にやきもて
焦土となりぬ住みもあへず星と立去る雖も此へも安かる
とひとしい黄泉幕府の末世なりしに天正十六年五月に
豊臣秀吉公嶋津義久の征せらるを攻んとして九州に下
向ありしかば程なく降参をしかば上洛なして
六月二日第宿に帰りぬ二十人者遣帰ひ
ひ博多あるとんぬんして南蛮船に乗博多に
ふ時博多の富豪神屋宗湛といふもの兵械の

雑とさけく伝く肥前松浦郎唐津に宗岳せしかば博多に
来り秀吉と拝謁し進物を捧ぐ此宗湛を元来茶人
と好みなりしかば天下名を得し茶人千利休天王寺屋
宗及等と会しつつ相謀れりとも世にあらんと思ひ
立去年十月の末に庵津を出発赤間関より舟に乗
仲哥まで京に上て京大坂堺に第宅を名を偽
舎をり秀吉公に事を少なりて高槻しかるに翌天
正十六年正月に入大坂城に於て信長を招き茶の
会をなり荷宗湛も同しく召て茶を給る之時石田治
部少輔三成の茶を点ぜしむ初進物を
献し秀吉公に謁ん氏 進物ハ帛皮二枚弱皮一枚
忍布二端 沈香を作 此時天王寺

原宗及是を取次又秀吉公の命にて僧の原昊も拙
見に是より高麗とうけて原宗と共に第今ゆきまして
行ける話天名も招請せらる又 秀吉公の弁大和尚云
秀長卿大和の郡山に在城しまひらるゝと系図し 恕
過を蒙りなるべし 兼てより 秀吉公龍顔を恐れ去りし
ハ今年 秀吉公龍顔をもって物ひ付と仰せ付られ六月
十一日より 秀吉公 博多町と立んとて 指宿と書を賜ひ
十二日より町割しなる奉行ハ滝川三郎左衛門 長束大蔵大
輔 山崎志摩守 小西摂津守 大谷刑部少輔 三十人を始の
老人共を呼出し博多の町と十町四方と定め堅横に
小路を割 民屋といへども仰せ付られ其内 秀吉公段々

博多町ゆゑ民共ハ中やはらん 次の日と正面者
る者体愛法華堂なる 立ける所の門の脇ひだ博
多のほとりハ多のこと異城 防衛の変して且大宰府
への通路なれハ少と外面に南と西とし所割を面小
と設し東西と横に南の方ハ郭に横二千間を
以城郭とし屋敷の南ハ横に辻の堂れ東に
いる是南方西害れかこめとして其土塀今とあり
是ハ其ゝ内の臼杵安房守鎮賢と云一人行せる城
なるもハ安房列侯と号しなる 臼杵安房守ハ大友宗麟
の初めて志ゝ弟柱ゝ岳の陣ゝ居志ゝ天文ゝ元亀
の事と同りなる者ハ始ゝ八郎助と云後志ゝ安房守と号し人志
ゝ弟ゝ立陣せし時ハ城
ゝ弟ゝ立陣せしけれとも

明暦の ゝ博田ゝ

三坂の町ハ殘りなく今をあらため東西二西の
坂とむかしハ尾町の内なり袖の湊より南北へ通りて
ながいつのかたちなりはまなく今ハ絶てなきなり行事町
の内なる博多れ南の方より門を立てるをハ今も矢
倉門といひなく名のこりたりいまハ兵衛と言る人
けいこと築ちやう今兵学をなる人此西害の備をなて
後軍機をけつるは秀吉公の山町と再興
しなる時とを以人むかしの石高実成尋南北と縦横
屋敷を定なく屋宅をもなくして多くハ富人居り
是を東町と云縦町元九筋あるむかし左京府へ通り
是又唐船の名し海を通る通るゆへ南北の路を長く

せしなるへし東西と横としてあ狹しあ屋宅とも狹し
て富人ハ柿之元博多町数百十三町あり町の名ハ
いろいろかなへ名まいハ云ふ云記さる　老説云福岡の城と築
と兩博多の名那珂川を中流とつさ博多と接へ大門
石堂口と出て名浦なる名是他国往来の道なり
の橋を東西へ横町なれハ　秀吉公叩く平らまとなる屋
ふるきこと多つく狹し
縱へ通ると狹く博多の町と立玉ひしハ博多れ古
再度世を出るの此て名を東西
立並へしハ人れあつまること元のごとし此時博多れ富商
神屋宗丹宗丹宗室表口十三間奥行屋宅
と始り永く丁役と除れしハ今ハ家
を免除と為る之後世既と世事と屋しきなハ人

安堵の思ひとなりて近き者ハ怪ひ奇きことのもの集
まりしかハいかゝ昔こゝ立入り解屋の地こゝなりこゝ文禄
元年 秀吉公朝鮮征伐のこゝろ肥前名護屋の城こゝ住
ましまひ付十月晦日の頃彼宗冊こゝ家こゝ秀吉公と語ら
りて茶と進め饗應す御お供ハ織田右衛門尉一人こ御茶
れ面ひて小斎休菴一人こ御茶の所休菴一人こ石田治部
少輔ハ大名流を初め流十人余人行き渡の宗徒座敷も
人多くまゝ有こ所の家人こ殘もりさハかれ居人の天
下れあり浅座語をし家ゐることこと稀ゆなる事なり
今ハ國君歌舞と語侍すこゝ玉狸こゝ玉狸こゝ玉狸こゝ
こゝろハ尚古代質朴の風こゝ事を知りめ今四の

海波靜こゝて塵とあきに世せれを用おさやうまして
枝とゐこゝさに こゝまハ天下の人こゝうきいやしき皆大君の恵
こゝうて枕席と安んする事と得こゝうゐ給こゝいこゝ
太平日久しこゝれ人れ心ゐこゝて奢と好ゐこゝ
弱おのつゝこゝ貧乏ゆとやしむ是を塵世の俗習とし
人情の常ゐこゝハ家軍白頭ていまゝ所俗習を改
いこゝへの淳朴こゝ面せこゝ人こゝんや古風と立こゝ
人ハ家れこゝ稀とゐこゝて必感と記して嘆美こゝし天文
二十一年こゝ博多こゝ大明西蕩の法國こゝ高船の来ゐ
事やこゝ有こゝ後ハ博多こゝ異國の船絶て来ゐこゝ時
こゝを袖乃浦と称こゝ始こゝ天文廿一年こゝ今元

孫十四年と八九百六十年とあり也 之後大友義鎮威勢
を振舞し時 中後府中と異称と為せり又 之後紀夷
の舟も肥前平戸に付く 長崎と大明及諸夷の舟も
来る事ハ又 之後の事也
博多にて正月十五日松ちやしと云事と云行ふ 之法式も
先貴人とやうに福禄寿夷大黒天乃形ちこしよ馬と
家せかうへの上に蓋をさしかさし 雑詞を唱ふ 次に
小なる俵間に車をはつけ小童をのせ着衣と為せ
車武門に 国名代鉾に ちうう猿楽代謡の曲長あり
ちうかき 笛拍とうこに笛吹鼓 大鼓を手にて祝言乃
音をあらしめ 城より ゆりて 博多代市中を廻る 古老

の言伝に ハ 高倉院乃御宇 安元元年 小松内府
重盛公黄金三千両と大宋国へ渡し 育王山へ施入せ
ら其使に 先博多に下して 宋に渡さるべし
時博多代里人多く 重盛公の恩賞と蒙り 名を八重
盛公の没後に及て 其恩を謝せんと 正月に松囃子
と云事を始めらる 是より毎年恒例 なりて今
りのごとやしてうに松原やく 小松原やくとうとへう 今
祝して 松やよ 小松やよ 是長久年より 寛永
十八年に 三十二年いらるゆくや 中絶せしを 忠之公
の時 寛永十九年正月十五日 博多代里人再興し
て今に至て年々 代陣負外郎と云者唐土

台州の人々 後光嚴院應安二年より乱をさけて日本に
来り博多に住し上京して 将軍義滿に種々の合巵を
献じ勅中 逸頂重と高称義あり京都西洞院り
宅を編りて子孫世々逸頂秀代秘法を伝へ代々愛
博多に住し亦京都に住せり いつの頃よりか博多
住を止め京都西洞院四条上る所に子孫家を繼て
逸頂重と唐名を家業とし又相列小田原代逸頂秀八
小原氏改の府郎の家僕を小田原へ出して逸頂
重をうしむ今に子孫博多に住し逸頂
秀代本法は二家より外に伝へず逸頂
制せしかをうしん

古哥

けしきのほんそ博多にてなるを彼の
さそ所ろ〻行けるけ後に
後拾遺 うつとつきく家方を夢やおきつん
茶ちさきまつをうつろふ大武之遠
堀川遠音 滅亦やけ〻乃神と加と
ゝ行こ〻あり〻と紀つ〻なり 菊昌
日 かゝ人の志賀代小島り舟出して
ゝ神と時行く家ちり 後拾
支木 舟あそし博多をいつこつ博ハ
しゝ新羅乃山を天ゝ行 国基

わか恋ハ博多織いつかかる帯の
ゆこのたゆこり追風をまつ　隆源

拾玉　筑紫やこれやけふこそ唐の人
名のりとこたへもあらぬ事なれ　慈鎮

荒津

三代実録に那珂郡荒津をもて博多の津事をとゝせり
紀に博多ハ那珂郡といひあらはゝ其舟のつく処といへるなるへし
然もハ太やう一所にして別に古哥にあらはの崎とも
よめれハ博多の辺より荒戸山まてを荒津といへるか
つとひと通言なきハ今ハ博多にて荒戸といへるなるへし

万葉十二　草まくら旅行君をあらはまて
おくりそきぬるあきたらねこそ　無名

同十二　あらはの海我ぬさまつりいはひてん
はやかへりませ面かはりせて　無名

同十七　荒津乃海しほひしほみち時ハあれと
いつれの時か我恋さらん　作者不詳

同十二　白妙乃袖のわかれをおしみして
あらはの濱にやとりするかも　同

夫木　沖津乃船あらはの浦の波まくら
かしいめこのく袖ぬれにけれし　衣笠

万葉十五　神さふるあらはの崎によする浪

まるくやいはをとめてくるるん　土御門院

袖乃湊

博多とまいりて唐房に入て湊とむ　江恵の川は博多に東
より流れて住吉と博多に別るゝと西へ出て那珂川と入る古
川のあとなる故に博多に東より西
の方へ向て入海通りとを神の湊と云は入海小
り南東より西へ出て神の形のごとくまはりて
しるを今博多に入定るを東西岳ちのるり行所にいふ
変の清流と東西に清海通り今長と大なるを云ふ
神代湊の跡まるゝ湊橋〜ゝ　神の湊代跡まる湊と

うをしゆへなり

浪こゆる神のみるめをまつ浦に
ここをてをひろを言をみるめる　帷宗忠宗

續千載

ひはけいとあをいとこころのこ
さくる神乃みるとるりなり　後深草院の内侍

同

ちるまでも神のこゝろ岩ぬる波の
うへ松ふさなくこゝろるゝ　ねハ　中臣祐臣

同

湊をみ神のみたまに成ぬる
はるをうきのれかけやしなり　津守国助

續後拾遺

うゝ月を湊のさゝくワゝ神乃
みるをや恋をるるるるん　後二位行家

新勅撰　あしはらの清の神はれそめ
　　さくらかと人のみるまで　国助
新拾遺十二　いくそたんもろこし舟はてるかも
　　しらぬさくらく神のこころを　前大納言為定
千五百　うゑそうし唐土ふねとまるかも
　　神のこころ波ちらすかしら波　三宮
續古今一　千ちはやく神はれみるなみ波ちるこそ
　　ちるこし舟を取るの春風と　定家
新續古今　置つる神のこころをの浪まつ
　　ゆくようさもの数はりるらん　前大納言忠良
夫木　日ぐるまを神のみなみ波ゆく雲
　　さりく知るまいはれかるやうゆらん　光俊
同　まつく浮神のみなとこまよせん
　　こゝろこし舟はてるこゝろめ　有家
續後撰　新たまきてやうる月れ人しまに
　　しるくはらく神のみなとり式部王
夫木　ゝこの海をなりれて落るるこゝ川
　　神れこゝろ乃はらく名もなし　為家

梅田社　祇園社付　竹多町の境内にあり

此社昔は南面にして社の前太宰府往還の西にあり
ゝ近世社地ハえのこゝろあて寅の方に向ひ御社を設め

つゝまり鳥居も寅の方に建り祭る所の神三座中殿ハ
櫛田大明神左殿ハ天照大神右殿ハ祇園大明神なり
櫛田社ハ人王四十六代孝謙天皇の御宇天平宝字
元年に河内國の櫛田やしろを勧請ゆゑに櫛田と
いひて社とし櫛田明神といへるハ天御中主十八世の孫
彦久良伊命の御子大若子命と垂仁天皇の御宇
越の國に出雲の御河彦といふ者と平らけくまかりて大若
子に勅して標剣と称ふ則幡と号して退治せしハ
こゝ切と崇して大幡主命と名とゝ称ふ伊勢にも櫛田の
社あり又祇園社ハ素盞嗚尊なり此神ハ櫛田の
朱雀院御宇天慶元年為京純友追伐初度ハ

追討使小野好古郎従博多のはゝとして合戦ありし神の
助と祈りしに勝ぬ山城國祇園の社と勧請せしゆゑに
櫛田祇園社産の祝
九列軍記に見ゆる 天照大神と合祭なりしハいつの
事なるや詳ならず 注古ハ二月六日神輿沖の濱に渡御
なりて小秋退治の祈ひ行なしゆゑ今ハ六月七日
沖の濱に渡御なりて夷社にまゐり御旅所に
社に渡座なりて今ハ神輿渡御の事ハ毎年六月吉
日祇園の祭礼を猿楽とも祇園山
とこゝに博多津中とかきもてあるゆゑ是ハ後花園院
永享四年六月十五日にはまりて昔ハ山の数十二を
いつの時なりしか数へて六ツとなりしを武振ハ本なるく

墨とこしらへまつりて色どりかうりて人形やうの
ものをすへていのりへまし故事をまなび長坂甲冑を
着せ或は兵杖をもたせ旗幟をさしの仕業と
はいへどもまことにけ社前に進め博多町中をもてあそ
京都の祇園に比すべき其製造あたかも京都に劣り
毎年異なる趣向を作りて人々を製造し此事人々
もてはやしけりはをきあの士庶集るのごとく国中の
男女濟ぬれ遊宴なり山と呼んで兼てより博多の所
々にありけるにてやうなるをもつくりて作り山の西に置
人街に満て昼暑き盛なるに押合て居をくいるる
しきる様にて かやうの人れ集る所ハ人家の多き

稀にて西にて久敬ありて作り山を粧ふハ主を方に有る
なるを日数と多くなるまて金を行ひゆへ長しき家にも
後にハあるまてまうけさうにて作りひと倍にまてをと
おり 同防国山口にも六月まつりハ毎年祇園の祭にてあり
是大内家全盛の時京都と学ひ事多くなりし久都
の祇園と学ひしにやまた 又十月廿二の卯れは新嘗会を
作り山と学ひ作りしにや
今にもてはやしえれ是なれ
中の小祭多かりと云へども今ハ主なる人作り作る作り社
内と古来一日あり 三月一夜七日守里人おのおのて松浦佐
依姫の寄納せしより始まりと伝依姫ハ 宣化天皇の
御時の人と稱され社を建てうるる後 孝謙帝御時
変て勅使せしりハ時代前後を遠し行れハ里人の説信

し難しこれハ法隆寺の他所へ寄納せし燈籠なりと後世疑
と寄納せしや主格を不審不審不楓感旦客之と記せる
し京都の人言ふこと天正五年豊後国綾部古蔵
先ゝ以る大友家代々燈の古き格を削り去て新しふ
つくる文字を彫く書て刻こと府家寄進の如くせり
古き格を削り除今もなゆ元禄三年博多代高人相
訪茂之寄之新しく燈と一口鑄て古燈と神殿に納
め入新燈と燈楊とかけうり元弘三年肥後国住人菊
池入道寂河を 後醍醐帝に二心なき法方なりし
尚国賊法師と称し探題少弐英時と討んとせつつ
百六十騎と門率し二月十三日 宰府大道と西に向て

賊法師と池り掘田の社前と上西る府に軍の出とやふ
さまを今又弟子ゝとやゝ答めるいくん寂河の馬一
匹を進ず菊池入を大ゝいくいる神にもおくせよ
寂河の戦場に向ふ弟子と答るもやうやあるを後か
ゝハ矢一筋弟ゝもん更て河殺せゝて上ゝの猪矢を
投出し神殿の廉と二矢まてを射ゝ自矢を放
つとひゝく馬ゝ直ゝれハさとあゝ多て射西
ゝる事弱て後博多代住人奥氏部巫久吉ゝ石社
壇と見まハ菊池の射ゝるかゝ矢と獅子狗丈のゝ
含てゝをあきなれ 是九列軍記に記る孔明の
大地菊池の猪と尚り太平記ハ二矢ゝるゝ
て死しけるとかゝる

網場天神

網場所と云菅丞相九遷の時神れ流て船りあり
と世もひ海をたて表せもつくさるのき世てイこ
おくり所ゆくと所の海人舟れ網をとりて猫のあく主
し浦浦年世れいこりくく所休まくく名流と世下と
所社と建て網場天神と号ス今網場と称ハとこ
所まと　菅丞相九遷の時ハ筑紫の網場村の海をとりも網浦の天神を
京さとりの所多の網場天神の都事のことし　ハやーろうろハ
摂津国渡戸の浦と渡戸の天神とてあり
神のみをもの入海れ得るあり　長元年今れ地と移り
社得れ寺と成就院とりふと言宮ふと十月十日祭礼
ろう

夷社

博多の小れ海を渡ひ夷の社を之むりハ
第侍八幡宮打所旅所と云　十月十日ハ神
輿渡しまひりと云　桜田祇園の神輿も六月十日ハ
所渡所ろて十二ろ夷社よ也ーなりと云

聖福寺

千光国師栄西開基の寺ろて建ちる屋せーろ世
九鼎宗暦と云ー住持の時石ろて一丹山流ろり今と
ろて称り安国山と号ハ丹山栄西ハ此庵と号し　朝廷
ろり千光国師と号と称ろり　久治二年入宋して始ろて
黄龍庵虚庵の禅を得へろ　建久二年ハ朝ハ号

日本に禅法伝来のこゝめ也哉と博多に於て宋人乃
至五百堂に嘉跡あり出不寺と立て事と称し
ト快と以て大将軍源頼朝卿の叡慮に達し其ト
文に曰

榮西言上

博多百堂地者宋人今建立堂舎之舊跡也而件
猜舎破壊之後再不修営之間偏為空地雖送
星霜既亦依為佛地人類不居住依建立一伽藍
欲備大菩薩御法樂致本家御祈禱并建立
堂舎安置丈六釈伽弥勒弥陀之三尊鎮護国
家且為除凶徒之障碍且為備向後之證跡殊
被仰下可加守護之由者佛法興隆之御願何事
如之哉者賜御下文欲遂造營之功而已
建久六年六月十日　榮西言上

此書形勢々へなりしなを云宗西自筆今に聖福寺に伝
ふる形勢々の袖判を又大ふる朱印右の文状ハ寸ふる
形勢々別に地を筑西に給ふ依て些ふと建国堂説法す
ふ所ふ也て是れ禅法ふ始めて興隆せり故に　後鳥羽院
ふり授来最初禅窟の額と宸翰に遊して給ふ之と
以て尚寺に頼朝卿と以て国基の大檀那ふ一ふ
仏殿に頼朝卿の位牌と安置し毎年三月に讃経執
りすえ孫十年二月十三日形勢々五百年ふに尚し

八住持丹岩禅師兼てより伽藍と集り法会をとゝのへて
逆津と吊い冥福を祈る遥遠慕古の志空て回恩を
石碑と謂つへし　此時國主　光之公より頼朝公の古新と
度く求め山列言旅山をもとめ寺号を
法会寺と称し昔けるの境内高麗うし
とゝや其衆徒の内今八民家となり変多し　小西門
町なる地と尚ほれあつるも所　今八むりて石碑と
内尚度しいまハ法堂法方ハ化り並へ鷲峯の
寺なるもこれ世のわかし博多交く兵火をかゝりて
焦土となりぬ　此時をつく光之より　秀吉公博多再興
の時御くかゝるとゝ　ちなみと再造ハ小早川隆景の

尚ほ仏しまひし時尚寺と方丈とを今ハ前堂是なり
ちなみ三百石と寺附せらる隆景の光より秀秋五法て尚
國と仏せられし時百石を減せらる　長政公入国の時変長
六年二百石のちなみと寺附る是ハ先國主小早川秀秋の
時寺附の例と仏せらる近年まもりて佛殿山門法堂用
山堂経蔵ハ造立なる昔三十八區を今十四區残まり
十塔あり一曰龍開室（冥山堂也獲聖院と云）二曰聚星山門と三曰冷
泉亭（今ハ変定なり）四曰無深池（宝珠院の内ちなみ跡あり）五曰通津橋（寺号
東小西教ちなみ跡ふるとの寺あり三系と右橋あり是也）六曰七里瀬（博多の海と云）七曰十里松（名称
松也）八曰妙理祠（法寺ちなみ）九曰金河（那珂川ちなみ）十曰鉄
塔（舎利塔也）ちなみと寺中と仏法多く毎の勧行の

法家一巻を写し今に有り其一への墨り書事を以て
板に書て世に弘る隆景れ石塔位牌あり隆景も
備後國三原の城に棄世をきる所彼地に墓あり
是は隆景逝去の後住持を恩恵と云ふ僧新て讃經
のことを立置しと云ふ又富士れ祇所にて号我
兄弟ときこれし備前吉備は宮乃社司大炊丙の墓
とし寺にて大炊内は寺の開山ゑ光國師の弟子れ
は地に葬られる三宝福と助んとして墓と
第ることんしるに黒田松寿 一説伊豆守の子息如水公の
子に伊勢守忠之は 妹の寿る如水公に如しく
京恐と号に 黒田甚四郎 如水公側室の寿る如し法名
只桃院 長寿庵 長政公の側室 甚

四郎の母 紀州上野の人 唐門の女 の墓 法住解 又は寺
墓し 京の桃山郡 上ノ京村 の東小代 例に 哥舞 と業とする 倡優 の住む所を
是は 栄西 法勲の法 唐土 より 法来 し 去 を 栄西
陀經 を 倡 へ 僧衣 と 殊 を 授け 寺院 とあり
て 金松山西光 と 号し 九品寺 と 名つけて 念佛
三昧 を 修せしめ 給 と 云 倡 へり 今 に 孫 念佛 を
やり 清廉 の 哥舞 と 業として 倡人 を 悦 ら 方 に
御 又 茶 を 代 て 京 都 祇 園 きの や 聖福寺
の中に 有 名 國 俗 を 名つけて 寺中 と 称 志 ア
新 泊 村 の 大日 を 安 新 芦 屋 と 云 佛 ゑ と 云 倡 優 の
影 ゑ 寛文十三年 住 持 第 水 國 君 に 仕て 佛 殿 を

立高知て造て釋迦阿弥陀の三佛を安置し
又山門を建て　後鳥羽院の宸筆にて額をかく
經藏を創立して一切經を納め旦法堂の彼岸を修
補し此世寺を切とな世り

兼天寺

聖福寺の南にあり松山と号し開山は聖一國師
圓爾なり　四條院の御時宋國より謝國明と云者
地多に來り仁治三年に松山寺を建て聖一國
師を請て開一世とし元亨釋書七巻を著
聖一國師開基法燈國師の佛燈禪師無準
に影ちの事を受て兼天禪寺及法堂の額法牌

等の大字を書て之を送る　今も書佛殿と額
仏燈法書なりしゆへに法牌なり　此外東福寺にあり
も西別の大講堂なり　彼寺は法燈國師を智山に
迎て承天彰寺とこれを建て孤峯と
とりれ　寛元元年　勅旨を承て宗福二刹と官
寺とし方智山の所とおさめ　元亨釋書にあり　此聖
福寺と同じく度々兵火にかゝりて仏堂三門も亡
くなりぬ　此時に佛堂は出来たれども三門は唯礎
のみ殘まり天文二十一年大内家の奇特にて尚宗形河
新野馬高宮平京三ヶ所門新第五院入洗浴兵把茶
宋神祠新の四百町地と大例と仏を寄とするよし

天平宝字元年十二月　秀吉公より三百石の寺領寄
附の朱印状中納言秀秋の時寺産を減して百石附せら
れ慶長の入国の後更に元の如く三百石の地と寄附し
給ふ其八塔頭四十三坊を今は十四坊迄なり
中に海龍庵を是席寺和尚用達の地と山寺に十境
一曰七里瀧二曰十里松三曰冷泉津四曰霊湍山五曰覚皇
殿（仏殿なり）六曰慈恩閣（三門なり）七曰獅子窟（法堂なり）八曰圓通閣
（観音堂なり）九曰吹耳閣（山門なり）十曰梅花廊（天神廊なり）是を用達
せし謝国明の墓を辻れ堂の　山寺の系譜府ゆ左
の如き例なる甚だ古なる楠木生なり又開山堂を
常楽院といふ今の南なる聖福寺　弘天寺十境乃

内なる七里瀧を是八塔多れ海なりと云ふ瀧の字和語
なりまりてなることを疑ひ古人と云ふ世さるるやかや
うれ誤りなれ先学なるべし古人なれいまて今更言ふ浅
かるべしと元亨釈書の説とを人の心せし例なる瀧
なる沙石なる川の流と云ふ中華に七里瀧といふ境地と
流れあるに沙石ある川の流なりなるとは洋の字と用ゆ
べし唐土に七里洋と云ふ所もあり

東長寺　真言宗

南岳山と号し（弘法大師と南岳和尚と云剣立の寺なるゆへ南岳山と号し）弘法大師
延暦二十三年入唐し大同元年冬十月朱雀方地なる沒
なるもなる翌年四月下旬なるまて此地に滞留し一宇れ

加藍を建立せらる大唐より来たる猫柱及佛舎利
一粒を當寺に納る又密教東漸して弘く東国に傳
らん事を欲して東長寺を建てられ後に寺を大師
の造像とあ是に始て大師堂と云ふ物を初め堂
多海を廻て東西方三十五院五區を分の呉服所
八四至を云古跡を元弘の乱に兵火に逢て寺院悉く
焼失に幸ひして石動の像及絵像と寺内の林中に埋
る大師の像猫柱の類を拾て志戸敷志ヶ村に移し
る後三年を経て再び寺を建立すと云へる始乃
ち及び後三年に新坊を建て交刻を寄宿
集ると物語る狩法自作の佛像り第の画像

及び経猫柱佛舎利が始て又いまへる九州乃
傳法の寺と為て灌頂を行ひしとや 忠之云の時
和堂護戸堂焼失大日堂と再興し寺産と二百石
寄附しも承應三年二月十二日 忠之云卒云しも
終に寺と廢る猫死の者五人を田中五郎兵衛竹田勝
迫長兵衛兵衛深見右兵衛尾上惣兵衛あと又山伏数
流も猫死す些六人の墓も 忠之云の墓に前にあり

妙樂寺 禅宗

聖福寺承天寺の乃ちる石城山妙樂園満禅寺と
又些る其ちめハ博多小の浦と云 今も三浦と
むり奚城鑿来の法れしより石垣と第々り 些寺三ヶ
妙寺と称する町とよ

とも石城山と号し外門を湖亭閣と云三門を吞碧
楊と云と日華の人境福と云人と云り是皆海辺に臨
む寺なる故に名付るなるし吞碧楊の記と大明の臺
源禅寺の住持朱復記る洪武年中の事と天文七年皆
多火災にかかりて廻録に及て此寺も悉く焼失
せしかハ僧法号俗家と記して居なる　長政公入国の
後地を改て今れ所に立つる開山ハ月堂和尚諱ハ京
禅又知足老人と云る祖先京俗名大保村の人にて大慈
寺源の弟子也　花園院正和五年妙楽寺の開山となる
世に創立せしなるへし南朝の正平辛酉に歴寂す七
十七歳古ハ子院二十七座ありて今ハ絶て三座あり往昔

も志賀郡茅屋小人を九野小楊井を湯山村にて七十町
の寺院附りとなる　祖世の後退散もり今四宮六丁位
前君光之ゆり寄附しもの

善導寺　浄土宗鎮西派

寺町西例にる光明山と号し開山ハ慶誉上人と云武列
金川の人と也性氏知る氏此人龍後寺苦学る再興の後
康正四年中に多くの末寺を建て尚寺造立の形容にて終り
文明九年に建立成就せり家塔頭十六坊ありて今ハ
塔頭一坊残る　後土御門院の御宇一条御所形る
の寺　偽りと称る今に於て仏殿ハ大慶及武家
豪族より寄附をし文書甚多し　其外ふるき仏像

古画和漢の名筆為物語多し筆と記し難し文刻の
多き事国中共一と京都及他邦も亦稀と

称名寺　一遍宗

行士居町にあり此山と土井道場と云重波山と号し後
醍醐帝元亨二年開基なり開山を素阿上人と云故に
こゝハ称河名河と云名号を此塔所に
仮堂長年中まで有りしが今ハ一坊もなし寺院の
宝物数あり亦武家代文書数通あり寺領なし

龍宮寺　浄土宗鎮西派

冷泉山と号し開山ハ谷阿上人と云開基ハ年号詳ならず

此傍　四條院仁治二年に迂化す寺家と云伝へ
ハ此地を法御堂と云寺号を龍宮と改めし事ハ
貞應元年四月十四日博多のあり人魚と掛得り
けり彩延と奏問しをれハ冷泉某なりとて
此寺に居住せしむ時安倍為盛の
人魚出現の事とトひ家長久の瑞兆と申なるやの
て人魚と申に付こゝに龍宮と号するなり
以る為に又冷泉山と号ハ冷泉某なりと迂化
まして此地に荒神堂を建て行基の
化と云伝へり文明二年京祇法師西国に下り博多に
暫く居られしが寓居九月廿七日此寺にて

連亭一切無行色付ふ祇り發句と

秋文め松乃けしきめ時は風

正定寺

見仏山と号し智恩院の末寺と開山と感誉上人と云

後土御門院明應年中開基なり感誉は義浄法師

導寺十七世の住持と云て別当阿義無の　西定

院と云し人感誉と協議し寺領寄附せらるゝに依て

西定も号し始め堂塔伽藍ありしかは一區なりなく

なりしかは什物と恵心僧都の書る曼陀羅を世

話と鄭ひおくられ行乳

大乗寺　真言宗

法皇山と号し昔は律宗にして西大寺の末なり　垂山

法皇の勅願寺にして天仁元年の頃浄土宗なり故と法皇山の号

を永禄八年の頃浄土宗なり西保元年国君

忠之公改宗して真言宗と成り西保元年国君

本尊は弘法大師の作なり観音と付物愛珠を英

忠之公経一寸三分なる観音と称し愛珠は日本と称して稀なる西家

代創珠塔啄木院代なり国の宝なり

忠之公なり　東照宮現の御神像と寄附せらるる

多聞七観音と名仏を大乗寺代なり観音仏法の

作妙音寺の正観音と云　愛化観音寺西観音と云愛化

聖福寺代なり観音　乳岩寺十一面観音

此寺石和龍宮寺に次ぐ寺なり慈覺大師此山に六坊を
分て一佛詳なりし所長寿なる古佛の御坊なりしを
七坊衰れ内なる人さ尚寺の坊なりしハ毎月十七八日
第話の人多し

法性寺　日蓮宗

寺町にあり修昌山と云　稱光院正長二年日親上人
開基なり是第國に法華宗家初の寺と

入定寺　真言宗

寺町にあり慶秀山自性院と号開基の時代詳なら
ず所蔵ハ石祈の地蔵なり　長治元年家信開基四
英元一成和尚開惟真院頼真　後別当年の人なり　元和四年

八月十日此寺に於て入定して死す故に名とす
長治元年堂と建立し此時十石寄附せり
此寺内に池あり蓮池なり寺町をすて蓮池と云

明光寺　曹洞宗

寺町にある大宝山と号す開山ハ無雜化和尚と云開
基の時代詳ならず乱世の時衰廢して唯小菴のみ残り
しを寛永年間君患之公時保科淳四郎正直任領
となりて建立の外祈願所なり此故に寺産
五十石寄附し外に安國寺金龍寺明光寺福泉院多
曹洞宗此三寺に拾人中曹洞宗の長として法令を
出す変なり

石堂

いしゝ　博多より七堂と号する処あり善覺堂辻堂石堂
奥院堂萱堂脇堂尾堂と号し古昔佛堂の名なり
もとハ佛堂ハ全くして町の名なり石堂ハ別博
多東のはしと川を橋と渡りて此橋第拾及番目
に那珂と西方道と山川昔ハ名かりしを大友氏家臣臼杵安
房守堀せしより以来ゆへ今川と云昔ハ法恵川ハ博多
と住吉の方と西方しの川の流を西方にて洪水乃時
水勢あるく水損多しそ南より少し直りて松原の
内を西に是別今氏石堂川と昔を承天寺聖福寺乃
後ろ第拾氏松原つきて今の川なる処も元来松原

ありしなり

辻ノ堂

博多より御笠郡の方へゆく出口を辻氏堂と云山を
昔を辻堂をしるや辻ノ堂氏屠児むり八今の辻堂門外
の東柳木を堂を居住をしの後ろ川の東を移りて町と
なす史より松原と西ひ乃ろ氏て住来ハ

右之外博多所在の寺氏名

妙音寺　隆江山梅岡院　属于叡山　行願寺　海印山菩提院
清江山菩提院と云しの元禄六年於　延暦寺ち所なり十石　門上山寺　初ハ
京都り光門流より山号寺号を改む　天台宗　下同
成就院　本願院　開松院　属于大安寺
東林寺　瑞鳳山東林禅寺ハ博多矢倉門と曹

河家之用基ハ的光禅寺様之ご祈願　光之
公の寧居立花氏重幹力を合て元禄九丙子年
建立さり東林寺元和頃新芳和田村ニ立し
金龍寺ニ属すること世慶絶せりと元
禄二年金龍寺者長老こち号とらひて初
めて茶屋一宇をいとなみ丙子代嚴一寺成就す
翌年丁丑前住大亀屯山和尚を招待し同廿
六日入院　光之公　綱政公新て屯山を東林寺
の開山とし一臘住持をしむ同時十月廿六日
光之公郊遊の次ニ東林寺の南門より入禅堂
の前を経るとしるの寺門の常住ニ屯山を

ち代書記東林寺既ニ中興せり又右　邦君ニ
新て加列大亀禅寺の直末寺ハ日本曹
洞の祖道元禅師代ニ亦徹道義仏和尚開山の
地ニて越前国永平寺ニ並ぶ曹洞宗の大本
寺屯山芳住の縁ニ依て屯山翌年田場ニ及
て法嗣湛堂長老（湛堂ハ時ニ長崎の住持なり）と東林寺の
二世ニ代元禄十六癸未歳湛堂奥宗ニ移る
ニ成て宗像郡祥雲寺の第四世長老を請て亦
三世ニ代

西方寺　宝珠山浄土宗　末寺　報光寺　大堂山　海元寺
長恩山　一行寺　三笑山　観音寺　大悲山　多福庵
（派属ニ智恩院下同）　（属ニ西方寺）

屬ニ海元寺ニ 壽福菴 屬ニ若狭寺ニ 日水菴 屬ニ行寺ニ 選釋寺
屬ニ任吉妙圓寺ニ 榮昌菴 上同 順弘菴 屬ニ正浄土宗ニ 本岳寺
西昌山日蓮宗屬ニ京都本法寺下同ニ 本長寺 松潘山 本與寺 起雲山
妙典寺 杉本山ニ屬ニ本法寺ニ 京妙寺 榮昌山屬ニ法性寺ニ 光泉寺
袖湊山時宗屬ニ称名寺ニ 第行寺 屬ニ西願寺ニ 順正寺 上三同 妙靜寺 上同
圓龍寺 同上 善照寺 屬ニ万行寺ニ 覺永寺 上同 妙行寺
直屬ニ本寺ニ 西教寺 上同

右の外博多七觀音大寺ニ代系ハ詳ニ
記をしゆへ茂ニ載さるなり

筑前國續風土記巻之三終